令和４年度　第２回　大津市社会教育委員会議　会議録（概要）

□　日時

令和５年２月８日（水）　１０時００分～１２時０６分

□　場所

大津市役所　新館７階　特別会議室

□　出席者

＜社会教育委員　９名＞

＜教育委員会事務局　６名＞

生涯学習課長　ほか５名

□　傍聴者

なし

□　内容

１　開会

２　会長挨拶

３　議事

（１）子ども読書活動推進事業　調査・研究スケジュールについて

（２）令和４年度子どもの読書活動に関する調査結果について

（３）令和５年度子ども読書活動推進事業の取組について

（４）中学校における新聞の活用について

４　その他

５　閉会

□　主な質疑・意見等

（１）子ども読書活動推進事業　調査・研究スケジュールについて

【事務局】

資料１について、事務局より説明

【会長】

子ども読書活動に関する調査は５月に行うということか。

【事務局】

毎年５月に調査を実施しています。詳細は、後程、説明をさせていただきます。

【会長】
スケジュールについては、今後、資料の内容で進めていくということでお願いします。

（２）令和４年度子どもの読書活動に関する調査結果について
【事務局】
資料２について、事務局より説明

【委員】
２点お伺いしたいのですが、まず不読率に関して学校に行っていない子たちはどうやって調査を行っているのかというのが気になるところです。
２点目は、小学校の場合、４・５・６年生を対象としていますが、どうして４・５・６年生を対象とされたのかというその理由を知りたいです。

【事務局】
まず一点目のご質問であります。学校に行ってない方につきましては、この調査期間として設定している間に聞き取りが可能な範囲で聞き取りをお願いしています。そのため、実際に学校に行っておられない方に対して調査が行われてるかというところまでは、事務局として把握ができていない状況です。

【委員】
不読率の調査について、学校に行ってなくて調査ができてないという場合は、調査対象外みたいな形でカウントされるということですか。不読率としてカウントされてるわけではないということで、よろしいですか。

【事務局】
そのとおりです。

【委員】
わかりました。ありがとうございます。

【会長】
結構な数だと思うのですが、我々が子供の時と比べてかなり増えてますよね。各クラスに、最低１名か２名ぐらいいるのでは。そんな数ではないですか。

【委員】
そんな数ではない。もっといると思います。もっといるし、ずっと不登校の人というのではなく、登校したりしなかったりの人も入れたら半分ぐらいになると思ってますけど。

【会長】
　その出入りを入れたら不読率の半分ぐらいなるかもしれませんね。

【委員】
　月に1回、今日は行き渋りとか。そういう子たちがどうにか自分でバランスを取りながら行ってる子どもたちもいます。お母さんや家の人と話し合いをしながら、もう今日だけ休ませてみたいな、病欠してんのか行き渋りですって学校にその通り報告してるのか、各家庭のことだと思うけれど。そんな半分以下とか10人とかではない。

【会長】
　結構な数なので、そこをどう把握するかっていうのは結構大事だろうと思うので、そこのところは子供の実態をちゃんと把握するっていうことが大事だっていう点からすごくよい質問であると思う。
　そこのところについては、多分この要綱は文部科学省が出している要綱なので、追跡まで細かく調査はないと思うんですよね。この手の調査について国や県との関係を考えたときに、言われた通りにやってましたと言い切っても別に構わない。だけども、先ほど委員の発言にあったように、子供たちの実態を把握するには不登校の児童生徒の状況も含めてちゃんと把握して、学校には触れてないけれどもちゃんと読書ができてるのかとか、読書計画のところの目標を地方自治体として、地方自治の教育行政の範囲として、どう踏み込んで考えるのかという調査の仕方を、国からきた調査要綱はこうであるが市教委としてはこうしたいと考えております。ついては、県教委に対しても市教委としてはこういう風にやろうとしているが、県教委の方ではどうお考えかということも含めて、お話にされてもいいのかもしれない。
　そうすると、今の話であれば不登校の児童生徒を調査できてるかできてないかということについても、内数と外数で調査で判明した児童生徒数をカウントし、調査できてない児童生徒はちょっとわからないので不明であげるか、それを数字に合わせるかについては、市教委としての考え方だと思います。
　国が求めたものに対するものは、こうやって調べました。母数は在籍児童と書いてあるから、在籍児童でもよいと思うし、調査できた数であったら調査できた数でもよいし、両方書いて国に返しても構わない。
　我々はどう考えてこの調査をするという点についても、丁寧にするのかしないのか。その一方で内数に必ず入れる。というのは現場も混乱するので、先生はなかなか大変ですよね。今言われたことをやれと言われるのは。だったらどういう風にするのかというのを、もうちょっと簡便にしたらいいのかと、現場の負荷のことも考えながら、一方で不登校の児童生徒がどの程度読めてるのか読めてないのかということなども、おそらく今日、朝読書をやっているところでゼロになるってことは多分有り得ないと思うけども、それがゼロになるのは何なのかっていうのが、委員の質問の背景からひょっとすると不読率を押し上げているのは、不登校の子が朝読書をしていないから増えてないのかとか、そういうことがわかると全然政策の打ち方が変わってくると思う。朝読書をしていたら手を挙げるはずだと思うが、なぜゼロにならないのか。

【委員】
　朝に間に合ってない子供達もいますからね。

【会長】
　すいません。そうか、朝読書やってるかってやっぱり昼読書かな。ご飯食べた後にするとか、授業始まる前にするとか。朝読書という習慣がひょっとしたら朝読書は何か違う、朝読書の時間を何か違うことをして、昼ご飯食べていた午後の授業が始まる直前に読書する。寝てしまう子もいるかな。どこか時間を変えるだけでも読書率が変わるかもしれないので、何か変な話ですけど。ということですよね、多分。一番多い給食の前に読んでから給食準備入るとか。

【委員】
　そうですね。でも、なかなかね今の学校の流れからいうと、日課を変更するっていうのは難しい状況です。授業時数も増えましたし、そういうことから考えると。

【会長】
　登校時間もちょっと早くなったんですね。

【委員】
　登校時間を早くしたとしても結局、朝遅れてくるお子さんたちは同じような状況であったりだとか、登校時間を早くするということは、当然、職員の出勤時間も早くしなければならないということですので、その労働時間の問題も絡んできますから。なかなかこう簡単にはいかないところがありますね、正直なところ。

【委員】
　今、お話を伺っていて、さらにちょっと考えがおよんだんですが、１つは、今、会長が言われていたことはおそらく、どのくらいの重要性を持ってこの調査というのを行うのかっていうことだと思うんですよね。調査を行う側（先生）が実施するときに、とりあえず実施をしたら良いと考えるのか、それとも子供が将来ここにも書かれているように、豊かに生きていくための読書なんだというような強い思いを持って実施くださるのかという温度差があるのかではと思います。
　もう一つは、社会教育や生涯学習の読書調査なのに学校に依存し過ぎていないのかというのがちょっと私は不安です。社会教育における実践なので、もっと学校じゃないところでも子供の実態を把握できる方法というのはないのかっていうのを考えてもいいのかなと思ったところです。

【会長】
　多分、全数調査やりやすいのは教育委員会だからここでやってるわけで。委員おっしゃるように、文部科学省多分さっき言ったような細かいことやるともう全国でもすごい手間になるから、これぐらいの要項でそれでも何か大きなトレンドがつかめるのではないかっていうことだろうと思う。それで現場の負荷も考えながら大きなトレンドをつかめるだろうと。ただ、その大きなトレンドが掴めるというのが、学校現場のところで、しっかりこう細かくこういうことをいろいろ気にしてやるところは不読率が下がるだろうし、それは多分ちゃんとできているということで、アバウトにやってるとなかなか実態が把握で

きない。それはそこまでのものだという程度のやり方なのかもしれない。それを一定、市としての子ども読書推進計画の中で、これを一つの指標として追求していこうかということにしてるので、だったら何かちょっと調査の仕方を考えてもいいかもしれないという問題提起をしている。ただ、学校現場の手間もあるので、あんまり無理なことも言えないかなと思うのですけれども大きなところで、不読率の話とそれから委員からのお話しがすごく重要だなと思うのは、やっぱり朝読書やってるから読書率は上がるはずだと私たち大人はすぐに思ってしまうが、朝来れないという、そこの 20 分 30 分の生活習慣であったりとか、１校時目の授業には来ているが朝の会と読書の時は来れてないという。そういう子らがどれくらいの比率いて、実は朝読書をやっているんだから、子供の不読率の問題点を解決するには、その生活習慣をしっかりと変えていくことの方が、場合によっては効果があるし、そこんところはなぜそうなってるのかっていうことになると、様々な家庭の事情もあるでしょうし、生活習慣の問題もあるので、読書をやれやれと言って、旗を振るだけでこの問題を解決するんじゃなくて、その子供たちのご家庭の状況をどういうふうに改善してくのか、ということが問われていて、そこを改善しない限りは読書率は改善しないという話になると、やっぱり政策というのは、この部分のところで、現場の先生が頑張って読書をしなさいと言えば済む問題ではないということにもなる。

【会長】
　では、委員の二つ目の質問に対して。

【事務局】
　調査対象が小学４年、５年、６年生になってるっていうところにつきましては、こちらの調査も滋賀県からの依頼のあるもので、その対象が４、５、６年となっており、それに従って調査をし、結果を報告している段階です。先ほどもお話しましたように、市教委として１、２、３年生も調査の対象に含めて、結果を残しておくよう次年度に考えたいと思います。また、中学校もやはり高学年に比べまして、１、２年生より、どうしても中学３年生になりますとその朝学習の時間を受験勉強に向けた朝学習に切り替える学校も多いというふうに伺っており、やはり小学校についても、低学年の方が読む機会が多いかなというふうに考えますので、次年度に向けてまた方法等を考えたいと思います。

【会長】
　中学３年生のところ、朝読書をしている学校も残ってるんですね。また、朝に小テスト問題などをやられたりとかして知識の定着を図ったりとかしてる学校もあったりとかすると。それはどうなんですか、市教委としてその効果が、基礎学力の向上に繋がってるとかなにか検証はあるのですか。

【事務局】
　朝読書をやめて他の活動をしていた場合に、どういう影響があったかっていうところの調査に関してはできていないので、はっきりと朝読書を続けた方がいいとか、やめて他のことやった方が効果があるというデータは持っていません。

【会長】

それはもう校長先生と学年の意向で決まってくるものなのか。

【委員】
学校でどうその時間を活用するかっていうところですので、学校単位で考えてるんだろうと思うのですけれど。うちの学校で言えば、朝は一応読書の時間っていうのが10分とってありますが、先ほども言いましたが本校はやっぱり生活基盤の弱いおうちが大変多いので、その10分に間に合わないお子さんたちがたくさんいる状況です。昼にベーシックタイムという帯の時間として、基礎学力の充実っていうのをはかっていますが、それを朝に持ってきている学校もあれば、各々の学校の実態に合わせてそういうことをやっているとは思います。
質問の趣旨として、読書と基礎学力の部分を天秤にかけたときどうなんだということについては、正直私たちもそのデータとして、それがどれだけ効果があるものかっていうことについては取ってないので、多分どの学校もそこのデータは取ってないと思います。

【会長】
評価は難しいと思います。全国学力テストの得点で比較をしてみるとか。いや、そこの点ではあまり顕著な改善は見られないかもしれないが、例えば、どっちがどうかわからないですが。落ち着いて学習に取り組める雰囲気を作ることができてるとかっていうのは、どっちの方かわからないけれど、例えばそういうなことについて総合的な現場の先生方、校長先生のところの評価がどのようになってるのかっていうのが、一定あってもいいのかなと思ったので。最近は評価の時代ですから、僕はあまり評価するのがいいとは思わないですが。

【委員】
もう一点、1年生から3年生にこの聞き取り調査をするっていうことに関しては、先ほどの調査の仕方についておっしゃってたのですけれど、6月中旬ぐらいに5月の1ヶ月にあなたはどれだけ本を読みましたかっという質問なんですよ。それで、0、1から5、6から10などの幅を持たせて子供たちにアンケート取ってるわけですが、実態として1年生はそれこそきちんとした記録を取ってる学校でなければ、自分が何冊読んだかということを覚えてない。だから、そこで出てきた数がどれだけ信頼性のあるものかっていうことについては、現場感覚からいうと、非常にあやしい。取って本当に意味のある数字なのかどうかっていうことはあると思う。

【会長】
そこで、例えば考え方としてね、小学1年生の調査については、今やってる不読率の調査ではなく、本との関係性を調べるような感じで、図書館に行ったことがあるとか地域の図書館に行ったことがあるとか、学校の図書館にどれぐらい行ってるかとか、行っていないとか。小学校入るまでに親御さんとか、保育園や幼稚園の先生が読み聞かせを聞いたことがあるかとか、本との関係性を調べるとか。

【委員】
その方が有効であると思います。読書は好きですかと、そういうような質問の方が低学年にとっては有

効であって、何冊読んだかっていうことについては、僕はあまり意味がないかなというふうに思います。

【会長】
　先生のご指摘を聞いてなるほどなと思いながら、今こういう言い方をしたのですが、そうすると本との関係で、僕は自分の子供の読書の成長の様子を見て思ったのが、読み聞かせで聞くのが楽しい時とある時から自分で読んだ方が楽しいと思う瞬間があったんですね。そういうふうに読み聞かせよりも自分で読む方が楽しいとかっていうような項目でもいいと思う。例えばそんな項目が、逆転するのがいつなのかとかね、何かそんなこともいいと思うのですけれども、本との関係性や活字文化との関係性がどのように変化してるのかっていうことを、1,2 年生の時には追跡した方がむしろいいのかもしれないというふうに思います。
　本との関係性がどうなのかっていうことを追求するっていうのも、この子ども読書推進計画というのを推進するんじゃなくてそれも先ほど委員が発言された、そもそも読書するってことはどういうふうに位置付けられるのかということを、やっぱり政策として位置付けた上で、そのような調査の仕方も工夫してもいいのかなと思いました。

【委員】
　調査前提について、もう少し詳しく教えて欲しいです。

【事務局】
　大津市内の市立の小中学校につきましてはすべての学校から回答いただいておりまして、先ほどもありました学校に行ってない子であったりとか不登校の数などは実際にその時どうされてるかは学校に委ねており、実際に今の在校生が何人でそのうちの何人を対象としているなどの内容は把握できておりません。

【委員】
　わかりました。そうすると例えば 100 人で 100 人回答してるものと 100 人で 20 人しか回答しないものとではおのずと変わってくる。基本調査というのは 100 人回答できてないんですが、回収率がどれぐらいなのか
【会長】
　そのどれぐらいの回収率っていうのは、学校を通してやってるので学校が調査した数は 100%回答されてる。だから今の質問は、先ほどの委員の質問の不登校の児童生徒のところが、学校の中で先生が調査をされますので、そこに居なかったら調査できないのでその学生に先生が電話して確認すれば数字として入ってくるが、それをやってるかどうかということはわからない。

【委員】
　そうすると 100%全員の回答が返ってきてるのか。

【会長】

だから、調査した対象のうちの回答は 100%であるが、そこから漏れた児童生徒がどれぐらいいるのかということはわからない。

【委員】
わかりました。要するにランダムではなく全数把握ですね。

【会長】
全数調査ではあるが、その全数の中に調査ができた範囲というのがあるということです。

【委員】
はい、それはわかりました。ちょっと前提が不明だったので。

【会長】
いやそこ大事な話ですよね。どこまでをちゃんと調べたのかどうかっていうことですね。

【委員】
そうですね。100%は無理だとしても、全体を把握するっていうことに関しては一般的なばらまき型だと、３割４割っていうのが妥当だろうと言われてるのですが、こういう全数っていうのであればなるべく回収率を上げるっていうのは基本なのですが。前提が全然間違ってまして、そうですね何人か 100 人って何人かにばら撒いて何割回収できたかっていう話なのかと。

【会長】
じゃなくて、学校が全数調査をするっていうのは大前提で、文部科学省は戦後間もなくのときから、全部を調査した、できているという同じやり方でやっていて、我々が知ってるようにそのうちの何%が学校に来ていなかったりとかするという状況も起きてるので、そこも含めての全数調査にはなり切れてない。そこが全数調査するほどの調査なのかどうなのかということについては、文部科学省からそれほど強く言われてるっていう感じではないですよね。

【委員】
ありがとうございました。ではもう１点だけ伺いたのですが、これは聞き取り調査ということで聞いてる項目は、この調査項目に挙げられてる内容でよろしいですか。
【事務局】
質問としましては、あなたは５月の１ヶ月間に本を何冊読みましたかという質問で、０冊、１冊、２冊・・・10 冊以上の方は個別に何冊読んだかということを聞き取る形でさせていただきました。

【委員】
はい、わかりました。ありがとうございました。

【会長】
　さっきの小学１年生のところも、読み聞かせの経験とかを聞いたりとかして、それは誰ですかとか聞いたりしていくと、ひょっとすれば、読書好きと嫌いとで何か、環境がどういうふうに形成されてるかとか、読書感想文を書くのが好きですかと聞けば嫌いと答える子供がどこら辺から増えてくるかなど、やっぱりちょっとやり方を変えたほうがよいのではないかなど、国語教育の中心の人が考えてることと現場がどう違うのかということもわかってくるでしょうし、それから読む媒体がどういうふうに変わってきているとか、紙媒体を読んでいるとか、電子書籍をタブレットなどで読んでいるというのが増えてるとかっていう現実があるかもしれないですし、本当は何かそこらあたりいろんなことが見えてくるんだろうなと思います。
　読み聞かせの経験がない、してもらった経験がないというところと、あるっていうので何か有意な差があるとか、自立的な読書する力というのはどんなところで育まれてるのかってことがわかるようになると、政策の仕方も変わってくるかもしれない。

【副会長】
　質問の項目のことですが、１ヶ月に１回も本を読んでいない子供さんは、どういった理由で読んでいなかったかっていうそこまで踏み込んだ質問はないということですね。
　この議題に対して、子どもの読書推進事業っていう面から考えると、どうして１冊も読まなかったのか、ただ単に本が嫌いなのか、活字を読むのが苦手なのか、今までそう言ったような先ほど会長から出ているように、その読み聞かせの経験がなかったからそういうふうに触れる、触れ合う機会がなかったとか、ただ読むチャンスが出てこなかったとか、昨年の会議でも１回言ったと思いますが、今ヤングケアラーっていう問題が出ているので、そういったような家庭に帰ったときに、学校では読むチャンスがあったとしても、家に帰ってそういうような時間が持てないとか、本当にプライバシーに関わる問題でここにもプライバシーに配慮したっていうふうに書いてますが、そういった一冊も本を読まなかった子供さんの理由っていうのが見えてくると、読書推進っていうような問題に対して、取り組むことも見えてくるんではないかというふうに思っていますが、そういったような項目の質問対象は今後もされないのか、される予定もないということですか。

【事務局】
　今の調査というのは、冊数しか聞き取りができてない調査で、最初の説明にもあったように注意点と、先ほどのお話のように朝読書をしていると０冊の生徒数は少なくなるというところなのですが、やはり朝読書をしている学校でも数値が高くなってるところもありますので、児童生徒に対して、先生方からの聞き取りとかだけではなくて、調査票を教育委員会として作成をして、そういったものを今お話しいただいた理由も含めてお伺いできるような調査方法も良いと考えています。

【副会長】
　私としたら、その不読率というのはこの表を見ても年々上がってきてる状況ですよね。だから、ひょっとしたら本当に本人が苦手っていうような子供さんだけではないのかなっていう気もしてるので、何か

そういうものが少しでもいいから見えてくるといいのかなってというふうに思っています。

【会長】
　朝読書やってるから０冊にはならないはずなのに、そうなってないというのが一つのクエスチョンですよね。それから、今、副会長がおっしゃった読まなかった理由っていうのは、これはそれこそ読ませるためにどうしたらいいかということを考えるとすごく大事だと思うんですよね。
　大学の現場のところで単位僅少者の面談をするんですけども、その面談のところで学生に理由を選ばせるんですけど、その時に怠けたからっていう項目があるんですよ。そうするとそれに学生はマルをつけるんですね。実はそれ怠けたからというのに丸をつけたら、学校も学生も実は助かるんですよ。怠けてたら今年、単位が取れませんでした。大学もこの学生は怠けたからなんでと、大学としてすることじゃなくて、お前頑張れよって言ったりするんですよ。学生の方も何の言い訳もせずに怠けてましたからと言うんですけど。この前、１年か２年ぐらい前にある先生が、学生が怠けているというのは嘘ですよ。違う。授業についてこれない学生も全部怠けたからって書くんです。怠けるになった理由は、授業についてこないんですよ。何でそうなってるのかってことについて、本当は考えないといけないが、そこにマルを付けられたら大学も学生も助かるんですよ。それは実態を解明できないので、実は大学に入ったけれども、学校や学部や学科に興味がない、授業についてこれないというような、本当は何かもっと深刻な問題が背景に隠れてるかもしれないのに、怠けたからって本人の努力だけに問題を落とし込んでしまうんですね。
　ここも同じだと思うんですね。本当は読むのがしんどいいくつかの理由があって、それは気がかりなことがそうだろうし、読解力の問題もあるでしょうし、実は字は書けるけれど読むのが苦手だとか、読むということについて 10 分間続けて読んだりとかするような、継続読書力がないとか、そういったことをどうやって見つけさせたらいいのかっていうことが課題なんだけれども。
　理由がわからないと、どうしたらいいかわからないので、まさにそこらあたりは本人に聞いてもいいし、最初の段階では、各現場の小学校の先生に不読率０冊の理由について、先生の見解を聞くとそうすると不読ゼロとか、先ほど委員がおっしゃったように、朝読書やってるのに来てないからなど、そういった学生揃いになりますと打つべき点はその家の生活改善ですね。しっかりと保護者の方と向き合って、朝ちゃんと８時半に登校できるようにされませんか。そうやって、本を読むということが基礎学力の向上にも繋がるし、生活改善も繋がるし、ひいては子供の未来に繋がるんだからっていうのをやる。そのやれる余裕が欲しい。先生は強く言いたいですよね。
【委員】
　そのとおりです。

【会長】
　学校現場のことはよくわかっている。そうなると、そこの一人一人の不読率って言ってるけれども、そこから見えるのは、学校現場がどれだけ大変かということの背景でもあるので、そこを含めて問題を改善するというのは、これの数値を改善するためにはかなり学校にてこ入れをして改善していかないと、子供たち一人一人の学力も高まらない。そういったこの不独立の問題と学力テストの相関とか、そんなことも何かわかってくるとこれを上げて下げて、読書率を高めて、基礎学力を高めるということも必要

ですよねっていうと、違った政策の力になるだろうと思うので、この1点からでもいろいろと教育現場や子供のことを考えていこうというふうになりますね。

【委員】
　特定の何かを絞り込んでモデルケースとして、入口に不読率というものを使って、そこから入り込んでいくと他の課題もなど把握できれば何かに使えるわけですね。

【委員】
　現場から言わせていただくと、これ以上いろんなもの学校に持ち込まないでほしい。正直なところは。
　ただ、学力調査の中で、家の中にどれだけの本の冊数がありますかっていうのを聞くアンケート項目があるんです。そこの冊数が多いおうちの子供の学力は比較的高いっていう相関は出ています。それと、読書時間が長い子供の無回答率が下がる。
　つまり、何も書かないで白紙で出すっていうやつですね、無回答率が下がるという結果も出ていますし、それは肌感覚でも僕らは感じてるところです。だから、読書が子供の学力の支えになってることは間違いないというふうな感覚的、もちろんデータとしてはあれですけれど、感覚的なところでは十分それは認識してます。
　だから、昔からですけれど学校では、やっぱり読書の推進ということは子供たちに伝えてるし、朝読書なんかをそこへ入れてるっていうのもその一つのあらわれです。なかなかそこに実効性が伴わなかったり、或いは、感覚的にはそうなんだけれど、実際それで、例えばですけれど学学のポイントが上がったとかっていうところが、直接、教員には結びついてない。これやったらこれがいいんだっていうところまでの実感がまだないから進め切れないっていう。
　これやったらこれできるよっていう、即効性みたいなもんが、或いは本当にデータとして出てきたら、じゃあそれを進めましょうかっていうふうな動きとかになっていくが、まだそこまではないというのが現状かなと。

【会長】
　そういうデータをまとめて出すのは、校長先生が使いやすいデータをやっぱり提供するっていうか。

【事務局】
　そうですね、学力・学習状況調査の結果とかはある程度集約してますし、他の大学とかにご協力いただいて、統計データとしての調査っていうのはされているところですので、ある程度またそういうときにフィードバックできるように事務局としても考えてやってるところではあります。
【会長】
　学力テストのデータなんかをもとに、要するにデータ分析して読み取りさえすればできるようなところまで加工してデータを提供するというようなことがあったらいい。今のような話とかそれはどこかの研修会などでもらった資料とかでも、もっと広く共有されると先生方の感覚とデータが一致してるということがもっと広がり、PTAのところにも一定共有されると違ってくるだろうと。

学校から言われる学校からのお便りでかかるんじゃなくて、PTA の活動で何か読書を広げましょうとかっていうのがあったりとかするのも必要だろうと思うので、そんなことが広がったら良いかな。

【委員】

少し批判的なことになってしまうかもしれないですが、皆さんの今までの議論を聞いていて、不読についての理由は多分様々あるということで、子供たちの実態を把握や読書活動の今後の推進においては、よく知っておくっていうことは、重要性があるだろうということは、私も理解はできます。一方で、いくつかそれで疑問が浮かんだのですけれども、まず一つ目は子供の調査リテラシーみたいなところっていうのは、調査に踏み込むと難しくなってしまうのではないかということです。

二つ目が、私も詳しく図書館法など知らないので恐縮ですが、戦後の図書館の設立の過程で借りてる本とか、何を読んだかっていうことは明かしてはいけないという、それが図書館で守らなくちゃいけないところになってきていると思います。どこまでその子供たちが何の本を読んだのかとか、そこをどこまで踏み込めるのかっていうところが、私はわからないというのが二つ目です。

三つ目が、不読の理由を知っておくということは、学校教育において大事なことかもしれないのですけれども、そうすると、生活指導とか生活改善の方がメインになってしまって、今ここで言われているような、例えば、言葉を学び感性を磨いて人生をより深く生きていこうみたいな、ある意味生涯学習的な読書っていうものから少し距離を取ってしまうのではないかということが疑問点です。もしかしたらその不読の追及も大事かもしれないのですけれども、よく読んでいる子に例えばどういうときに本を読みたくなるのかといったような話を聞いてみた方が、子供たちが読書を発展させていくときのヒントをたくさん持っているかもしれない。そのようなことが見えてくるのではないかなと思いました。不読の追及は学校教育には役立つかもしれないのですけれど、生涯学習や社会教育における読書活動の推進においては、学校教育における読書活動の実態把握をメインにしすぎて良いのかなというのが、特に学力などの話になってくるのではないかと考えられなくもないため、私疑問です。

【委員】

前回も言ったと思うんですけれど、僕読書は趣味やと思うんですよ。その趣味をずっと続けられるかどうかっていうことであって、学校教育で完結するもんじゃないし、学校教育の間は別に本を読まなくっても何となく読書って面白いよねっていうような感覚さえ持ってたりとか、新しい方に出会ったときの感動がちょっとあったりだとかってしたときに、大人になって読んでみようかなとかっていうような動きに繋がっていったらいいのかなっていうふうに思ってるんでね。図書館司書を入れた学校は、本好きの子が増えたっていうデータもあります。

それはおっしゃる通りで、不読率を下げようと思ったわけじゃなくって、きっとこんな面白いもんあるよってこんな楽しいもんがあるよってこんな世界があるよっていうことを教えてくれはって、子供がそこに食いついてきたみたいなところで、その本を開け広げてみようかっていうところから始まってるんだろうと思うのですよね。

だから、あくまでも学校っていうのは、読書の種をまくみたいなそういう場所であっていいんじゃないかなっていうふうに思うのですよ。読書感想文が本嫌いの子を生むって先ほどおっしゃいましたけれど、実際ね、私が子供の時代は絶対出さないといけない夏休みの宿題でしたから、もうそれで本を嫌いにな

った友達はいっぱいいるんですよね、正直なところ。
　最後のあらすじだけ読んでそれを写して提出してる子がいるというのが正直なところですよ。そんな子よりは、そんな感想文書かなくてもいいけれど本は面白いよっていうことを伝えてやる方がよっぽど値打ちがあるんじゃないかなっていうふうに思ったりもしますけれどね。
　だからおっしゃる通りで、あまり学校の中で読め読めっていうのをどこまで進めるのかっていうあたりは、僕は現場にいる人間からしたらね、考えものかなっていう気はしますけれど。

【会長】
そうですね。いや、委員の指摘はごもっともで、だから、そもそもこの子ども読書推進計画もそうだし学校教育の現場で読書推進をするのも、生涯学び続ける力を育むためのものなんだけれども。ところが特に義務教育のときとか、それから高等学校へ入ってからずーっと競争的な環境にさらされてしまうと、自ら楽しむということよりかは、何かの競争のために使われるような要するにそれは教育の目的が変わっていると思うんですよね。だから、どう生涯学び続ける力を身につけさせるのかっていうのが大きくて。
　中教審の答申で生涯にわたって学び続ける力を大学でつけさせると言う方針が出されていて。それなんかをどう大学の現場で作るのかっていうのを今、考えていて、でもそれは大学のところでやるだけで、暮らしの中にそういうものをどう作っていくのか、そのために学校っていうのは一定の大きな役割を果たさなきゃいけないから、役割を果たしましょうということなんだけれど。
　自分に適した学びを自分で見つけられる力とかっていう、なかなか高度な力ですけれども、学び続けるような姿勢とか、そういったものを、小学校というかどう関与していくのか、それぞれの年齢に応じた見つけ方をさせることができるのかという話だと思うんですね。おっしゃる通りです。

【委員】
　この前うちで絵本専門員さんに来てもらって、赤ちゃんとママに、うち、２歳児までの子供たちが集まるんですけど、絵本の選び方楽しみ方を絵本専門員さんから学ぼうっていう企画をしたんです。
　そのときに絵本専門員さんが言われたのは、絵本に発達とか子供の成長とか考えるなと言われた。あれは、親子のコミュニケーションツールの一つの媒体として考えてくれたらいいので、子供にとって母親の声が一番ここちいい安心するものだから。ただ子供に何かずっとしゃべり続けるのは大変だろうと、だから、じゃあじゃあびりびりってこんなことがあるよっていう媒体の一つとして使ってくれたらいいんだから、そんな絵本を、これで発達を成長を促すとか、あんまり思い過ぎないでとお話しいただいたんですけど、それを聞いてうちの子供たちを見ても、確かに本って好きなもの、委員が言われるように趣味であって、押し付けられて読むというものではなく、うちの中学２年生が珍しく太い本を借りてきて、先生がすごくおもろいと言ってくださった本を借りてきてずっと読んでいた。なかなか本を読まない人だったのですけれど、やっぱりそこなんやろうなと思えば、不読率っていうのも一つ、これを一つのきっかけにしていろんな人が考えるという意味でアンケートは取ってもいいけれども、押し付けてはならないっていうか楽しいもの。
　ここにも本が大好きな大津っ子を育みますって書いていただいているので、これに対するアンケートの方が意味があるのではないかなと思いました。

【委員】
　このデータだけでね、すべてを語ることは避けたほうがいいかなとは思います。本来、大津市が目指してるものは、このデータを根拠にはしないほうがいいんじゃないかなという、これ一つのデータであることは間違いないですけれども。

【会長】
　そうなると、やっぱり何か違う調査のことを考えた方がよくて、本との関係性とか本が好き嫌いとか、読むのが好き嫌いとか、自律的に読むのが苦手とか、本を読むのに苦手意識があるとか。何かそういったものが、好きな評価を含んでもいいと思うけれど、何かもうちょっと違う指標で。
　言葉を学び感性を磨き表現を高め創造力を豊かものにして、人生をより深く生きる力を見つけていく上で欠かすことができない。というふうなものに繋がってるかどうかっていう。
そういうものになりうるっていう問題であるかどうかという、読書というのがこの観点からどういうふうに子供たちにとって結び付けられるのか。こういうものになるようにできたらいいなというに思ってくれたらいいけど。
　読書と児童生徒の関係性の実態をもう少し概括的に把握できるような方法があったらいいかなっていうことですね。

【委員】
　ひょっとしたら、学校の先生が読め読めと言うから僕は読まへんという子がいるかもしれない。
　そうすると、学校が本を読んだ方がいいよって思ってるから言うけれど、ひょっとしたらそれがあかんのかもしれなし。或いは、読みたい時間に読みたいのに朝の読書の時間だけというのはどういうことなのかって言う子がいるかもしれない。
　でも、先ほど言われたことから考えたら、本当に僕ら学校でよかれと思ってることが、この実態としてはどうだったのかっていうのもわかるかもしれないなと。

【会長】
　さっきの不登校の子の問題にも関わってくるが、うちの子供の同級生で授業中ずーっと先生の話を聞かずに本を読む子がいて。だけど、本を読むのは大好きで、授業にはついて来てないけども本なら１日中でも読んでる。本を読むのをやめろと言われるとすごく不快になり、学校に行きたくなくなる。学校に来させるためには、放っておくしかないということだと思うんだけれども。
　様々な子供たちがいて、僕らの世代とかだったらその授業中違うことをやるっていうのは止めなきゃいけない。だけれども、そういう部分でよかったのかどうだろうかっていうのはこの 50 年間経って、今の現実いろいろとあると思うので。難しい問題だと思うんですね。

【委員】
　前回、会長が言われていたことかなと記憶をしているのですけれど、例えば家庭文庫とかそういったところにも私は調査に行ってもいいのではないかと考えます。ここに挙がっているのは小学校や幼稚園、

学校が中心なので、例えばフリースクールや家庭文庫。多分、プレーパークさんとかもそうだと思うのですけれど、そういった子供が集まる学校外の場所にも出かけて主催をされてる方とかに聞いてみる。子供たちがどれぐらい本を読んでいるのかとか、遊びと読書の具合、例えばゲームと本の割合はどのようなものなのかとか、聞いてみるのは一つ、学校の中だけの読書感とまた違うことが見えてくるのかなと思います。

数年前に、子供の家庭文庫に関するみすず書房から出ている「子ども文庫の 100 年」という本を読みました。最近は、家庭文庫の方が子供たちの読書の変化を見ていて感じてらして、系統だって子供が本を読まなくなっているっていうことを不安だというふうに書いていたのがすごく私は印象的でした。例えば、ずっとこれまででであれば同じ作者の本をずっと借りる子がいたとか、もう探偵ものばかり借りる子がいたとか。でも５、６年生になっても絵本ばっかり借りていくといったような変化を感じられているようでした。このような子どもたちの読書の質も変わってきているということを、よく知っていらっしゃるのは身近にずっとその子供が読んでる姿を見てきてる人達と思います。もちろん学校での読書活動というのも一つ把握できるんであればいいかなと思うのですけれど、地域でどのように地域の方々が子供の読書の場をつくり、見守ってきたのかというのを知るのはこれから調査を行う上で大きなヒントや読書活動推進のための意義が見えてくるのではないかなと考えます。

【会長】

公共部門だけが担うだけではなくて、非公共と言ったらあれだけれども民間の中の自発的な協力の中で、そういったボランティア的な活動とかがどれぐらい広がってるのかってことについて一定程度調べた人ですね。今の話からすると、同じように子供の放課後の流れからしたら、学童の現場のところにどれぐらい、そういったものが備えられているのかとか、うちの子供が行っていた学童は、学童が３階で２階が図書館だったので、本を借りに行くようなこともできた。うちの子供を見てると、学童のところにはコミックがたくさん置いてあって、それはそれで結構僕はよかったと思う。読書っていうのが、僕らの時はやっぱりコミックは除外されるんけれど。考え方はあれで、コミックの見方、紙のめくり方を教えてくれたらいいかなっていうぐらい、ちょっと幅を広げたほうがいいのかもしれない。

そういった民間の中での読書活動の実態がどういう障害を持ってるとか、そういったところに対して、どんな公的な援助が必要なのかと。それから学童の現場で、本に触れるような機会が作られてるのかとか、コミックが多いとかっていうのがあったら、何か改善の方法ありますかとかっていうのもあると思うのですけれども。

本当は多分、小学校を卒業する時にそれまで使ってた方とかで、よさげなものを何かみんなで寄贈しあうだけでも、ちょっとした文庫はすぐつくれると思う。そのような地域で作っていくような運動とかを組織でできるような声があったらそれは違う。

（３）令和５年度子ども読書活動推進事業の取組について

【事務局】

資料３について、事務局より説明

【委員】
　私もブックリストとか読むの好きですし、いろいろなところで置いてあるのを見るの好きなのですけれど、これは誰が選書をされるんでしょうか。

【事務局】
　教育委員会も同じ組織の中に図書館がございますので、図書館には専門職員司書を配置しておりますので、そういった方の協力を得て、そういったリストを作成できればなというふうに考えております。

【委員】
　司書の方が薦めてくださる本っていうのは多分面白いし、いろんな角度から薦めてくださると思います。先ほど出てきた子供たちにせっかくアンケートを取っているので、子供が子供に薦める本も載せられたらどうなのかなと思いました。
　多分、司書の方の薦めてくださる本とは全然違うものができて、読むとやっぱり子供が好きな理由というのがわかるかもしれないという点で、また新たな議論が生まれるのではないかと考えます。
　子供が面白いっていうものってこういうものなんだっていうことを我々が知るっていうこともまた一つ何か大津市の社会教育における読書推進において、次の新しいものを生みだすのではないかなという気もします。

【会長】
　それはありますね。子どもが保育園に行っていた時に、ある本のあるページにいくと本を叩きたがるっていうパッチンとかっていう。それを大人が見ても何が面白いのかわからないが、それは現場の先生もよく知っていて、この本をちっちゃい子に何回読んでも喜ぶっていうのがあってそれは保育園に行ってるとそういうことに触れるけども、ここでの課題は保育園に行かないその家庭で子育てをされていて、幼稚園に行かせるようなご家庭にもそういった情報がうまく伝わるといいかもしれないですし、そういう話ですよね。いろんな人のおすすめ、保育士のおすすめ、幼稚園の先生のおすすめだったりとか、先輩ママのおすすめとか。僕が本を好きになった絵本とかっていうのが乳幼児とかに入ってくるといいのかもしれない。

【委員】
　商業施設等での健康相談とあわせた読書関連事業の開催っていう部分ですが、具体的にはどういうふうなことを考えてるのか。

【事務局】
　今年の秋ぐらいに平和堂の坂本店に比叡すこやか相談所が開設されるという予定になっております。
　比叡すこやか相談所はそれぞれの機能を持たせるんですが、結構広い場所があるということを聞いておりますので、そこでこういう読み聞かせ事業ですねボランティアさんであったりとかそれから学生等の方に協力を得ながら、その読み聞かせをさせていただけたらなというなことを考えております。
　あとここに挙げておりますように、アルプラザ瀬田やフォレオー里山、ブランチ大津京などといった商

業施設がたくさんございますので、そういったところのと会場で気軽に親御さんが来て、楽しめる絵本の読み聞かせを楽しんでいただけるようなそういう環境づくりを作っていけたらなあというふうに考えております。

【委員】
基本的には読み聞かせが主な形になるんですかね。

【事務局】
そうですね。こういった乳幼児期の方々を対象にした事業ということで、特に来年度からは、この事業を重点的に実施させていただきたいと考えております。

【会長】
そのときの現場の担い手っていうのは、比叡すこやかとかきらきら広場の運営者なのか。

【事務局】
先ほどもお話をさせていただきましたけれども、今、生涯学習課の方で読書ボランティアの方が60団体ぐらいあり、この方々からも読み聞かせの協力をしたいというようなお申し出もしていただいている団体もおられます。こういった団体さんに協力を得ながら、大学の教育学部の学生さんですごく関心を持っていただいてるようなところにもお願いをし、一定協力していただけるということで、こういう方々の協力を得ながら、商業施設等での読み聞かせができればと考えております。

【会長】
それが資料４の３項目目の読書活動ボランティア関係で生涯学習課が把握して60団体が２月に交流会を行い、事業開始に向けた研修を５月に開始するっていう形ですね。

【事務局】
そうです。そういった方々を対象にした研修会、交流会を持って、こういう事業をやっていきたいというなことを皆さんの方にお願いしていきたいと考えております。

【会長】
この交流会研修会は参加費無料だと思うけど、読み聞かせ事業をしていただいたら交通費ぐらいは出したりとかするのか。

【事務局】
これから新年度予算の議会審議が始まりますので、交通費程度のちょっとした謝礼が出せればということで予算要求しております。

【会長】
　団体の活動に対して援助が出るとかっていうことはないのか。

【事務局】
　今のところ来ていただいた方々への交通費、個人さんへの交通費程度っていうところを考えております。

【会長】
　そこはどうやったら読み聞かせをやってる団体にとっては、自分たちの地域で行ったりとかしてると思うのですが、それとは違う形でここに協力してもらうというので交通費は当然としながらも、団体の人にとって何かやる意義みたいなものを見いだしてもらえそうなのですか。そのあたりどういうふうに政策スキームの中に考えたのかっていう。

【事務局】
　最近、そういった読み聞かせという読書活動を推進していこうというＮＰＯ法人も立ち上がったというところで、特にその団体さんからはこういった事業に協力的で、研修会の時でも講師になっていただいており、そういったところを中心に、お願いしていこうと思ってますし、なかなか既存の団体では高齢化や活動を中止されている団体さんも多いですけど、こういった事業をしたいと興味を持っていただいてる団体については、自分たちが研修で学んだことを生かしたいと思っておられる団体もあると聞いております。

【委員】
　発達段階に応じた取り組みいうことですが、新規拡充事業と乳幼児期から就学前のそちらの方に何か偏ったと言ったような感じが、重点的な取り組みがあるように感じるがそれは何か意図があるのですか。
【事務局】
　子ども読書活動推進委員会っていうことで、小学校の先生方とかが入った庁内の会議をさせていただいてる中で、やはり小学校に入られた段階で本を読みなさいとか言ってもなかなか子供さんは本を読まない。やはりもっと早い段階から、本が好きとか本に興味を持ってもらうとか、そういったことを理解してもらう、思ってもらえるような環境づくりをしていくことが必要ではないかというご意見がありました。私どもが思ってるのが、本当に学校教育だけではなく、社会教育という視点で先ほどの話の児童館でもそうですし、図書館でももちろんそうなのですけれども、いろいろなところでそういった環境が整えていけるようなそういう整備をしていきたいなと思ってます。
　少しでも本に触れる機会をふやすことによって、子供さんに興味を持ってもらい、本好きとなって読書をする機会が増えていければと考えております。

【委員】
　人間も自然の一部ですから。見る、聞く、話すが大事。子どもにあわせた教育。読み聞かせと合わせて

音楽を流すなどの工夫も必要と考えている。読書ばかりのルールを引いてもダメで心の声も大事である。心の豊かな子供を育てることが大事である。

【委員】
　今のお話でもちょっと関わるところもあったらいいなと思うのですけれども。発達段階っていうと、やはり個人になると思うのです。教育って、大きくですけれど二つの方向性があると思っています。個人がよりよく生きることと、そのより良く生きた個人がよりよい社会をいかにつくっていくのかっていうこの二つの大きな方向性があると私は思っています。その時に、前回も少し出てきましたけれども、やはりその大津市民として大津の郷土を愛していくような子供を育てるといったような、社会にどのように子供たちが生きていき、よりよい社会をつくる市民となっていくのかっていうところの観点が、なかなかこの発達段階っていうことだけだとちょっと見えづらいような私は気がしています。
　人生をよりよく生きるために見つけていくっていう一つの読書はいくつかいろんなのがある中の一つであろうと思いますけれども、一方でその人がより良く生きていくことはとても大事なことなのですけれど、その生きたものがどんなふうに公共的に社会貢献的に言うのですかね社会をつくる担い手になっていくことに繋がっていくのかっていうところが少しこの表から見えづらいので、もう少しその何ですかねその二つの方向性を示せるような読書の推進事業というのがないものなのか、ちょっと疑問です。

【会長】
　今日、計画を持ってないので、そこらあたり計画のどこでどういうふうに書いてあったかっていうと、私もちょっと把握できていない。どういう位置付けになってました。

【事務局】
　基本的な目標としては、楽しく読書ができる環境づくりを進めて本が大好きな大津っ子を育みますと、いうのが大前提で大きな目標です。
　生涯学習っていうと、その個人が学んでそれを幸せに感じるとか生きがいになるとか、そういったところがあるのですけれども、ただ生涯学習であるとそれを生かして成果を還元するというようなそういう視点でもあるのですけれども、今この計画の前提でいくと、まず行政としてそういう環境づくりを進めていくことによって、本が好きとか本に興味を持ってもらうそういう子供さんということになるのかなと思います。

【会長】
　今の論点、すごく面白くて大事な論点で。社会人大学院生のドクターを指導してて、僕の年上で彼がずっと生涯学習って自分で考えてきたことがどうも何かしっくりこなかったと。
　自分が理想とするものと社会教育学会の議論とか何かこうしっくりこないっていうので、うちに来られたんですが、彼の話をずっと聞いたら、今の話の論点、まさにそれで生涯学習というのが、みずからの豊かな人生を作るっていうところで、それを社会に貢献してもらえばいいですよねってのは最後にくっつくんだけれども。それで本当によかったんだろうかっていう院生の方の問題意識であって、そうすることが生涯学習今までやってきたことは、実は、一人一人の個人を強めるってことは載ってるけれども、

社会的な紐帯を積極的に作るっていうことには社会教育がどうも失敗し過ぎたんじゃないかというのが、彼の問題意識なんです。

それで、今のお話を聞いて、なるほどその論点に繋がるのかなと思ったのは、そうすると、さっき僕が質問したボランティア団体の活用の話なんだけれど、そのボランティア団体に対するまなざしっていうのが、我々はこの子ども読書推進計画をする時に、彼らの団体からそういうふうに生きがいを持って自分たちの学びのスキーム、学びの成果を社会に還元するかというところなんだけれども、その先にはここでの商業施設での取り組みのところでも、何か子供たちが読書にこう親しむという観点だけではなくて、その連れてきてる親御さん同士が横の繋がりをつくるような工夫とかも、ここのところではあってもいいのか。

さらには、そこに来られてるお母さんやお父さんたちが子供の読書活動に自分でも関わるし、そんな人を支援していこうとかいうような気持ちを持ってもらえるような活動のきっかけにここの商業施設の取り組みとかっていうのがなるっていうことになると、子ども読書推進計画っていうものが先ほど委員が言った個人がより良く生きることとより良き社会をつくる構成員を育てるっていうその二つの側面が、本来、社会教育というものは、必要ではないだろうか。個人個人の学びというだけではなくて、よりよい社会の構成員市民を育てる教育になるためには、何かもう一工夫が必要だと。その一工夫のところが事業ベースでいくと、子供たちが好きになってくれたらそれで事業ベースの指針としては市教委としてＯＫなんだけれども、それを超えたもう一工夫というものが入ってもいいんじゃないかと話を聞いて思った。

そうすると研修の中身も、ちょっと一工夫が必要ではないか、そして事業の展開としても、子供たち自身が乳幼児が本に親しむというだけではなくて、その親御さんたちも本に対する関心であったりとか、それを自分の子供に対してもそうだけれども、社会的な関心を持っていただけるような、何か一工夫欲しいなという気がしました。

【委員】

確かにおっしゃられる通りで。その研修もうまく読むとか感情的に読むっていうことにするのか、それともこういうふうに親御さんにも声をかけてみましょうとかそういうふうなことになっていくのかっていうのは多分全然内容が変わってくると思います。

【会長】

単なるスキルではなくて、その場を親御さん同士の繋がりをつくるような場にも工夫してみませんかとかっていう問いかけがあるかないかで全然違うと思うのですよね。

そうすると、いろいろな個人情報の問題があるけれども、横の繋がりができたりとか近くの近くの児童館の乳幼児の時間にみんなで行ってみようとか、そういうなことをやってみたらどうですかっていう声かけの仕方であったりとか、要するに横の繋がり方だったりとか、それこそ研修の中で子ども家庭課とも一緒にやるわけですから、子ども家庭課目線ではどうなのかとか、子ども家庭課の方からすると、生涯学習としてはできればより良い社会をつくる構成員になるような親御さんたちがないようなきっかけを欲しいなとかっていうなやりとりをすると、全然違った研修になるかもしれない。

スキルの研修じゃなくて、スピリットの研修になるかどうか。社会を作っていく研修になるかどうか。

【事務局】
ありがとうございます。今おっしゃっていただいた会長と委員のを参考にしながら、研修の内容はこちらの方でもう少し検討させていただいて、スキルだけと違ってもう少しそういった幅広い形の研修を考えてみたいと思います。

【委員】
何かそういうところの内側から心を送ってくるようなことがあれば、読書でもスポーツ何でもね、内側から起こるものがあればいい。

【会長】
地域でできることって話でね、今おっしゃっていただいた話でいくと、さっきのよりよい社会をつくる構成員を地域の読書活動とかでも広げていくことができるかっていうふうに考えたときに、商業施設でのそういった取り組みはあるが、その上の大きな矢印のところが児童館・公民館への出前絵本講座とか、ここの地域の中でそういった講座とかを作って、公民館の中に読み聞かせのサークル団体を育てるとか、そういうふうな視点を持つっていうのが大事だと思う。
だから、上のところで絵本作家などによる講座のところでサンプルがあればという話があったが、前にどこかであったのかなと思うんだけれども。
例えばそういった講座を作った時に、サークル化となるように小まめに声掛けしたりとかして、地域にそういった団体を育てるということを意識的にやっていくと地域でも一定程度お任せできる、役所が全部お膳立てするんじゃなくて、地域にそのようなものを作っていけるか。そうすることが、個人の力、一人一人の力量を高めるってことになるし、それを通じてよりよい社会をつくる市民を育てるというそういった視点で取り組めたらいい。生涯学習計画には何かそういうふうなことが市民性の涵養というあたりですね。

【事務局】
そうですね。

【委員】
今のお母さんたちを見ていて思うのは、コミュニケーション能力がやっぱり低くなって子供を持ちながら、もちろん携帯メールのやりとりとかいろいろあるけれど。コロナ禍になってマスクをして、もう一度ごめんなさいねとかいうようなコミュニケーションもすごく下手くそですし、ゆめっ子とか行っても読み聞かせをやってくれても、携帯をいじっているみたいな感じ。
個々のコミュニケーションのとり方を学び、参加者と参加者のコミュニケーションができる力っていうのが次に繋がると思います。小学生と中学生の子がうちにもいますけど、やっぱクレーム的に学校側に言ってしまう、親同士の会話をすることで解決できる内容とかもある。コミュニケーションが取れない子供たちの親が現場にいると、この読み聞かせをせっかくしても、ただ単の読み聞かせにしてしまう

というのは勿体なくて、これをきっかけにコミュニケーションの取り方ができるための、人材としてそのボランティアさんにあり、学生さんはそこはちょっと難しいかなと思うのですけれど、何かそういう部分で、せっかくの機会なので、やっていただけたら。

人生をよりよく生きていくため、多様な教育というもっと見えるんじゃないかなって。

やっぱり希薄化してますコミュニケーションを、核家族化になっているし、大きな家族であれば自然とわかっていた子育ての核となるものを植えつけられたと思うのですけれど、今それがないので、子供たちは孤独と不安で揺れ動いているところ、学習であったり集まることをやったり結ばれることで、そういう能力を高めなければ、本当に危ない社会というか気がします。

【委員】

この表を見たときに、子ども読書活動団体や市内大学生によるっていう書いてあったところに大学生は自分の勉強になるから大学生なんやなあと思ったけれど、子育てする時にすごく頼りになるのは身内以外で自分の子育てをしている年齢よりちょっと先輩のお母さん。10 ヶ月健診だったら、1歳ぐらいのお子さんを持っているお母さんがそばにいる、別に読み聞かせをこのお母さんに習うわけじゃなくて、このおばあさんのコミュニケーション能力と厚かましいさをあんなんしていいんやとか、子供にこんなふうに声かけてるんやとか、そこ今めっちゃ困るよねっておむつのサイズどうしてるとかメーカー何とかどうやったらいうのいいみたいなすごいこう、細かいところを共感し合えるのって、教えてくれる人を受ける人の関係じゃなくて、横の関係とかちょっと先行く人から学ぶんであって。読み聞かせのサークルだけじゃなくて、子育てサークルのお母さんたちとか幼稚園の子育てサークルのお母さんたちいらっしゃると思うので、子供を幼稚園預けてる間にちょっと力を貸してくれないかみたいなので、協力してもらったり、読書推進だからって読書関連の人だけに力を貸してもらうんじゃなくって、全然関係ないサークルとかでも、今大津市が読書のことやってるんやってっていうのを話題に上げてもらえたら、読書のテクニックは別に上がらないけど、そういえば本好きになったきっかけはあれやったわとか読まなくなったきっかけはこれやったわとか。そういう話題がそこらじゅうで聞こえるようになるんじゃないかなと思う。集まって読書の時間です、集まって読書の勉強ですとかじゃなくて、自然に集まって読書に意識が行くっていうか、何か耳に聞こえてくるみたいな状況になるのがいいかなって。

そのためには、乳児期のお母さんたちにはちょっと先輩のお母さん、じわり広げるために読書とは関係ない活動している、自分の趣味の活動している方々でもいいし、そういう人たちの協力がいるんじゃないかなと思いました。

【会長】

４番５番のところ、子ども読書活動団体に関わってもらってんだけれどもやっぱりそこのところ、おっしゃったように子育ての支援をしてるような団体も入ってくると多分全然違っていて。子供に読み聞かせをして子供に絵本とかに関心を持たせるっていうところだけが目的じゃない。親御さんがそんなことをやっていかなあかんなっていうことに気が付いて、そういうふうにしていくというようなことが多分大事なので。子供はどっちかっていうとだしで、親がそういうことをやっていかないといえけない。むしろそうやって、子供を育てていくってことについて、知育とかでも関心を持ってもらったりとか健康に育ってもらうんだとかっていう。

そういうことを健康とか知性だったりとかも総合的に子供に関心をもっと幅広く持ってもらうような

そういう総合的な機会にしていく必要がある。その時に、市教委として生涯学習課として読み聞かせのところの事業費がついてるんだからそこんところでしっかりそれやるってのやったらいいんだけれど、そこのところにバラバラと何でこいつをやるかっていう人たちがいろいろと雑談したりとかする中で、こうやってた人たちがそこんところで、しゃきっと何かいろんなことを聞いて帰ってくれたらそれでもいいと。そうすることが、子ども読書推進を通じて親御さんのサポートに繋がり、それがひいては子供の読書を中心として成長に繋がるってことが、よき人生を歩ませる一歩に繋がるとするならば、この事業はすごく生きてくると。

本が読むとか好きになるだけでも事業効果あるんだけれども、それを一つの機会としてどれぐらい総合的な成果を満たされるのか。研修の中身が問われるってこと研修の中については、生涯学習課だけじゃなくて保健総務課とか協働のまちづくり担当課とかにも来てもらったらいいかな。

【委員】

委員のさっきの意見は行政が活性化する意見で非常に良かった。

【会長】

令和５年の子ども読書推進計画については、それぞれ意見交換をよろしいですかね。

（４）中学校における新聞の活用について

【事務局】

資料５について、事務局より説明

【会長】

全中学校に配置したんですよね。

【事務局】

今年度に関しては全中学校に配置してます。

【会長】

新聞くらべなんか、これ面白い取り組みです。私の大学で１年生向けの科目としてまわしよみ新聞。遊びみたいなやつ。新聞を読んで何かの記事をみんなに紹介する。盛り上がった中身のやつを模造紙の一番上に書いて、自分たちで解説記事を入れたりとか吹き出しするという。

視野を広げるっていうことで新聞ってすごくいいので、ちょっと遊びの様子なんかを入れてですね、ぜひ中学校なんかでやるんだったら僕講師で行ってもいいです。

【委員】

新聞をとってないおうちが随分増えてますよね。だから昔で言えば学校で習字やるから新聞持っておいでって言っても、もう今ほとんど持ってこれない家もたくさんある。学校でやっぱり新聞に触れる機

会っていうのは、小学校もなんですけれど増やしていただけたらありがたいなっていう。ネットがあるじゃないかっていう意見もありますが、あれってやっていくうちに自分の好きな項目だけが先に上がってきて。でも新聞はやっぱり、自分の興味のないところも見つけられたりするので、ぜひ小学校に広げていただけたらなと。

【会長】
　読売や朝日が小学生新聞を出してますよね。なんかそんなのを予算化して、何かそうなのを意識的にやっていったりとかしてもいいと思いますが。親御さんの中にやっぱりなんか読ませなあかんのかなというふうな雰囲気を作らないと。
　議事の円滑な進行にご協力をいただきまして、ありがとうございました。

【事務局】
　以上で、令和４年度第２回社会教育委員会議を終了させていただきます。長時間のご審議ありがとうございました。